

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

秋田と海運 秋田城の史的意義 秋田人安藤昌益の発見 安藤昌益の学説信念

はじめに

秋田と海運・秋田城の存在意義・秋田人安藤昌益の発見・安藤昌益の学説信念の4回しか、今年度は会合の中止もあって、実施されなかった。

6月18日(金)の「秋田と海運」・7月16日(金)の「秋田城の存在意義」・10月8日(金)の「秋田人安藤昌益の発見」・11月12日(金)の「安藤昌益の学説信念」について文章化して報告する。

秋田と海運

東北地方は、昭和初期の我々が学んだ教科書では「奥羽地方」と呼称され、陸奥・出羽の順序で扱われていた。この陸奥が先で出羽は後に続く呼称の名詞が、陸奥が上位で出羽は後に続くが如く意識されている如くであった。幼少期の年代では格別不思議にも思わなかったが、自分が日本古代史の研究を行うような年代になると、歴史の実情としては反対であると意識するようになった。

国家行政の上で養老5年(721)に出羽国を「陸奥按察使」の管轄に位置づけたことから、陸奥の国府が存在する「多賀城」が奥羽行政の中核であるが如き観念が形成されたと考えられるが、これは地方行政の上でのことで、生活文化の上で、日本海に面した出羽側が先進的であったと考えられるのである。

奈良時代に「律令制度」による国家行政が成立施行され出羽国が制度として成立する以前に、実は「秋田郡」などは制度化されていたのである。

昭和48年7月に学生社からの『古代の国々出羽国』の著述を求められた時から、学術的にはそのことを記述したのであるが、その結論は研究が積み重ねられる毎に不動のものとなったのである。平成6年11月に高科書店から著述を求められた際に、『古代日本と北の海みち』なる著書を出版した際にも、日本海沿岸政治文化の先進性を論述したのである。

齊明天皇4年(658)に奈良時代には出羽国となる地方側には、今で言えば北陸地方知事とも言うべき当時の越国守であった阿倍引田臣比羅夫が、「船師一百八十艘を率いて蝦夷を伐つ。齶田、淳代二郡の蝦夷は望み怖れ降ることを乞う」と『日本書紀』に記録される状況があったのである。

秋田の首領である「恩荷」が進んで誓約し、「肉食なので弓矢を携帯している。反抗するためではない」と言い「齶田浦の神に誓って国家に忠誠を尽くす」と述べ、比羅夫は恩荷に「小乙上」の位を授けたと明記される。位階に相当する「評造」(律令制下では郡領)に任じたのである。翌年には鮎田・淳代の2評(郡)の存在が明記されている。

しかも肅慎にも軍事力を及ぼした阿倍氏は、生鬮や皮を献上しているのである。蝦夷地北海道や対岸大陸との関係を持つことの出来る海運力の存在が有ったのである。

養老4年(720)に「渡嶋津軽津司從七位諸君鞍男等6人を靺鞨国に遣し、其の風俗を見せしむ」という『続日本紀』の記述がある。靺鞨は7世紀末に「震」を建国して、668年唐によって滅ぼされた「高句麗」の遺民とされる大祚榮が中心人物であった。この建国は現在の吉林省敦化に於いて698年に行われたのであるから、震の建国約20年後に日本は津軽津司を派遣したことになるが、古くから対岸航海路は存在したことになる。

神亀4年(727)大祚榮の嫡子武芸王の時代に、第1回目の対日使節が来日したのである。天平18年(746)には渤海人など1100余人、宝亀10年(779)には359人が帰化を求めて出羽に来航したのである。そして渤海国が滅亡するまで日本に対する親密性は続くのであるが、この北方対大陸航路の存在が、対大陸外交に於いて太宰府と並ぶ大きな意義を持ったのである。平安京になってから日本側が北陸以西来航を求めても、延暦年代にも2回「漂着」と称して渤海使は出羽に来航し

*秋田県立博物館

たのである。

「表日本」「裏日本」の称があるが、伝統的には日本に於ける海路は日本海側のそれであって、太平洋側が主に考えられるようになるのは、米国と太平洋を通じて交わる近代になってからのことである。

いわゆる『征夷』などが問題にならず、対象論から出羽が解かれて久しい近世になっても、寛文年代の河村瑞賢の『西廻海運』の重視と東廻海運についての態度の差や、盛岡藩が寛文の東廻海運整備の時まで、雄物川舟運を活用し神宮寺から玉川に入り、国見峠や真昼山地松坂峠を通る物資輸送を行っていたことを視ると、日本海航路の伝統的優位性が理解できるのである。

秋田城の史的意義

前回話した斉明朝の時代の史料には、「あきた」のことを齧田や飽田と記され、「お（を）が」のことは恩荷と記されていた。聞いた書記官人たちが馴染が無かったからであろう。

それが奈良朝になり、『続日本紀』の天平5年(733)に「出羽柵を秋田村高清水岡に遷置す」と書かれる段階になると、「秋田」の表記が確定する。これは秋田の地が稲作が充実して評価を受けている実状が成立していたことを示すものである。だから出羽国の中核行政機関が南の国府から北の高清水に遷移されたものであろう。

そもそも出羽国名の成立には出羽郡名が先行している。出羽郡は越後国に立郡された郡であるが、律令国家体制が成立する段階に、今の山形県の庄内地方の出羽郡と陸奥国から分けられた最上郡・置賜郡と併せて出羽国が成立したものである。秋田・野代2郡はこの段階でも機能したものと考えられる。天平5年に雄勝村に「郡」を立てるといふ史料や、天平宝字3年(759)に雄勝・平鹿の2郡を建てたという史料もあるから、秋田県内陸の郡制は次第に整えられたものであろう。

越後国に出羽郡が設けられた翌和銅2年(709)には諸国の兵器が出羽柵に運送されたが、秋田城に出羽柵が遷されてから、秋田城は史上に度々登場するようになる。

対外関係でも神亀4年(727)初めて渤海使が

来訪したなど「北の海みち」を受ける重要なところの役割を担っていた。

天平宝字4年(760)には「阿支太城米」というものにも役割を果たしていた史料も存在する。公的な米穀の運用にも役割を担っていたのである。

宝亀6年(775)出羽国府を遷すこととするという史料があるが、実施については明確でない。宝亀11年(780)にも「秋田城放棄論」が史料上記述されているが、鎮狄將軍安倍家麻呂は朝廷の命令で、「秋田城介」を設けている。秋田城が出羽国の第2国府になったことになる。

平安時代になり延暦23年(804)には秋田城制を停止、秋田郡制を施行したとあるが、天長7年(830)には秋田城地域に大地震があり、それが六国史に重大事件として記されているので、城が存在しなくなったのではない。

だから古代出羽国の大乱である「元慶の乱」(878)で秋田城が攻められ大被害を受けた際に、政府首脳藤原基経は名吏藤原保則などを派遣し、処理したが乱後秋田城司に清原令望が就任し、後の出羽清原氏の出現に関係があると考えられる。

平安時代には天慶2年(939)にも俘囚に秋田城が攻められることがあったが、両乱が鳥海山の神の信仰を行政的にも深めたと認められる。

時代が変わって中世の武家政治時代になっても、秋田城の存在意義は薄れなかった。建保6年(1218)安達景盛が「秋田城介」に任ぜられ、南北朝を通じ秋田城を重視した。自分が観た朝鮮の研究者が作図した地図にも、東北地方の日本では秋田城が明確に表示されていた。

戦国時代になって近世に時代が遷る時世になっても、織田信長の嫡子織田信忠が「秋田城介」に任ぜられたことを、『信長公記』に「御冥加の至り也」と記されるほど名誉の対象であった。

秋田人安藤昌益の発見

特異な近世日本の思想家について、私が初めて認識したのは昭和25年(1950)のことであった。仙台市一番丁の本屋でいつものように関係図書を視察していると、この年の刊行であるE・H・ノーマン著『忘れられた思想家—安藤昌益のこと—』

なる岩波新書を目にしたのである。

この新書には「秋田の一学者」と明記していた。当時自分は秋田には未だ何の関係も持っていなかったが、山形県生まれで成人した自身が東北の同じ出羽国だった隣県の特異な人物に関心を持ったのである。早速求めて勤務先の仙台市片平丁の東北大学文学部国史研究室に帰った。

当然その特異性に感ずるところが多かったが、自分は日本古代史で「国造」や「律令制度」などを主とした分野の研究をしていたので、知識としては摂取したが研究対象とはしなかった。

それが、自身が秋田大学に赴任することとなり、8年目の昭和35年から翌36年の春まで東京大学に内地研究に赴くことが出来、しかも大学から直ぐ近くに下宿することが出来たので、付属図書館で読書することが日常的になった。

東大図書館には、明治期に秋田出身の学者狩野亨吉博士が確保し研究された、安藤昌益の大著述『自然真営道』が所蔵されていた。狩野博士が手にされたのは百巻93冊の大著述であったが、これが館蔵になった大正12年(1923)3月から半年後に起きた9月の関東大震災で焼失し、その時三上参次教授が借り出していたという12冊しか残存していなかったが、大著述の読解は努力が必要であった。

狩野博士は昭和3年(1928)に初めて、『岩波講座・世界思想』第3冊に「安藤昌益」を発表し、「一安藤昌益と其著書自然真営道 二安藤昌益の思索の径路 三安藤昌益の人物 四自然の正しき見方 五互性活真 六救生観」という章立てで、昌益の著述を明治期から研究したところを論述された。結果世の人々もこの特異の思想家がマルクスよりも百数十年も前に存在していたことを驚き知ったという。

狩野博士が明治32年(1899)にこの著述を手にするまでは、内田という人の手中にあり、その前は北千住に住む橋本律蔵のもとに百巻(93冊)が秘蔵されていた。明治15年(1882)に橋本が死去して所在が移動したらしいが、狩野博士も「某文学博士」と表記し自分の名を明らかにすることは無く、「大思想家あり」という文を発表したのであった。だから大正大震災以後の残部を研究し

た論文以上の価値が狩野博士の論には有り得るのである。

私が東大図書館で残っている『自然真営道』に接する機会を持って、強くそのことを感じたのであった。そこで改めて家永三郎教授の「安藤昌益の思想」(「史学雑誌」60-8)などを読んだのであった。

そして秋田大学の人間として浅いながら解った範囲で小文を書いて「秋田魁新報」文化欄にも送ったのである。そして秋田の文化人の昌益は江戸出身者で秋田人などでは無いと否定の論にも出会ったのである。そういう説もあったのであろう。

しかし狩野博士は、昌益門下というべき人物の、昌益すなわち『自然真営道』の著者は「藤原良中」で「秋田城都之住、天児屋根命百四十三代之統胤確龍堂藤原良中」であると述べる場所は明治に文献を手にした時から知り、秋田の出自の証を探していたのであり、その探しに当人も同姓である安藤和風秋田魁新報社長は協力していたのであるが、証拠は見つからなかったのである。

やがて私は「秋田城都」は明治以降の秋田市のことではなく、佐竹氏領守時代も「城」があった横手・大館の「秋田郡」を意味するのではないかと考えるようになった。

しかし「県南説」も行われているので口にはしなかったが、昭和46年5月29日「大館史談会」設立総会に招かれ、狩野博士の話を求められた際、講演の中でこの私見を述べたのである。その際に席に居られた石垣忠吉元校長が、昭和49年(1974)2月二井田一関家で温泉寺に結びつく「守農大神確龍堂良中先生」関係資料を発見され、昌益が晩年大館の秋田城下に帰って来てやがて世を去ったことを解明されたのである。

狩野博士が昌益が秋田の関係者で、八戸あたりにいたことを述べ、安藤和風が、昭和6年に『秋田の土と人』の人の巻で篤胤・信淵とならべて、昌益を評価した先見が、史料的にも証明されたのである。

安藤昌益の学説信念

狩野亨吉博士が昭和3年(1928)正式に『岩波講座』で昌益のことを正規の形で論じられると、

2年後には渡辺大濤『安藤昌益と自然真営道』が出版されたので、昌益のことは世に広く認識されることになった。

この学問的認識のもとに、昌益秋田人のことは常識となった。彼は八戸で医者としての生活をしていましたが、延享3年(1746)の八戸の「宗門改帳」では男2人女3人の5人家族で、その年彼は44歳であった。

彼には学問上の弟子もいたが南部人は当然で、京都・大坂・江戸・松前などの人々が居るのに、秋田の人は見えないのである。そのことが彼と秋田の結びつきを広く知られなかったことと関係があるかもしれないが、二井田では門弟達が彼の指導を受けて心服していたようである。

『二井田一関文書』の中から発見された資料によって、彼は元禄16年(1703)生まれで、宝暦12年(1762)に世を去ったことが明らかになった。その資料で、宝暦14年10月13日夜から14日朝まで温泉寺で二回忌法要が行われた際、門弟達が14日夜に昌益の跡目安藤孫左衛門宅で、「魚料理にて祝義」と村役人から表現されるような行事を開き、問題になったのである。

村役人は「近年昌益当所へ罷り出で、五年の間に、家毎の日待・月待、幣白(帛)、神事、祭礼等も一切不信心にて相い止め」と、門弟達が5年の指導で、村役の立場からは「不信心」と表現されるように変化したという指導成果を挙げていたというのである。

かくの如く指導成果とも言えるものを実現できる昌益の教育力とでも表現すべきものは顕著なのである。彼を嫌悪する人は知れば知る程一層その立場を強めたものと考えられる。

その彼の立場を『自然真営道』の文によって見ると、「直耕して安食する者は、天地と同じ行いなるゆえに、真の礼教なり」といい、「上下を立てながら、上下俱に領々の田畑を決して耕し、一般に為るときは、上下在りながら一活真の世に契りて、無盗・無礼・無欲・無財・無惑の世と成り、安年ならん」と論じ、芸術や愛に対しては、和歌など文芸は好色恋慕の媒となり、「不義」だと断定しながら、「夫婦」は「人倫の大始、娑婆世界の大本」と述べ常識的立場であると言える。

更に「男女にも上下なく一人なり」と江戸時代に男女平等を明言し、「若し妻死せば則ち後妻を娶る。二女を淫するに非ず。夫死せば則ち他に嫁す。二夫に交るに非ず。妻有って他女を淫す、禽獣なり。夫在りて他男に交る、又獣なり」と一夫一婦制を強調している。

『統道真伝』では「夫婦は第一倫、子を生む。親子は第二倫」とも記し、「男女にして一人、夜交わり昼は耕し、穀物を生じて之を食い、子を生む。世界無窮地」と記している。

彼は医師業で農耕はしていなかった八戸生活を止め、二井田では農耕もしたのであろうかは明らかでないが、専門の医学書が残っている。『良中子神医天真』という著述である。専門外なので視ても解らないが、早稲田大学・京都大学・内藤記念くすり博物館の蔵本が伝わっている。